

優秀賞

絵本と私

桃井 有子

私は絵本が大好きです。あの短い文章の中に、あれらの深い意味やメッセージが込められていることが、素晴らしいと感じています。

私が絵本に陶醉したのは、母の影響です。当時母は幼稚園教諭でした。私は四方を絵本に囲まれた環境の中育ちました。母の上手な読み聞かせが私と絵本のはじまりでした。母は、声色を上手に使い分け、たっぷりと絵本の世界に私を引き込ませてくれました。三歳のころの記憶では、母がいつも忙しそうにしており、私を寝付かせるときには、すでにくたくたになっていたことも幼心に覚えています。それでも、毎週二冊ずつ購入してきてく

れる母の絵本を楽しみにしている私を知っていた母は、一生懸命最後まで読んでくれるのです。ですから、絵本の物語の最後は大きなびきでいつもおしまいになり、私はそのいびきを聞いて眠りにつくのが習慣になっていました。

五歳のころには、児童書はたいてい読めるようになっていましたが、それでも、やはり絵本に勝るものはありませんでした。両親は共働きでしたので、一人できるときは、教育テレビか、本を読んでいるような子に育ちました。

絵本の影響を私が自覚したのは、小学校三年生のときです。特に勉強をしていないのに、級友たちより文章を読むことに長けている自覚がある嫌な子でした。しかし、それがなぜなのかを考えたことはありませんでした。三年生のときに、「へちまに乗って」という絵画が入賞しま

した。周囲の大人たちは、絵だけでなく発想力を褒めてくれました。しかし、私にとっては、褒められるようなことではなく、普段想像しているようなことを題材にそして描いただけのことでした。その違和感の理由をたどると、絵本の力だと気付いたのです。その後、私が絵本を好きだと知った家族たちは、母だけでなく、長女も手作りのしかけがたくさんある絵本を作って、たびたびプレゼントしてくれました。姉が描く絵本の主人公は、いつも私でした。より一層絵本の世界に引き込まれ、私の密やかな夢は絵本作家になっていました。けれど、画力も文章力もない、そして自分が出会ってきた絵本たちのような素敵な作品は作れないと、その葛藤のなか過ぎていました。

ときはすぎ、社会人になった私は、相変わらず疲れたときに、書店の絵本コーナーに行くことが習慣化してい

ました。大人になってからも絵本から得ることは多く、人間関係で悩んだときは『ペンペン』という絵本に諭されました。「どんなに大好きな人でも、愛し合っていても自分の一部ではないのだよ。」という内容の作品で、恋愛だけではなく、人とふれ合い社会で生きていくためには必要な考えだということや、もう一度考えさせられたことが印象的です。

一人暮らしも長くなったころ、誕生日プレゼントとして、母から一冊の絵本を貰いました。その絵本は、授かった子どもを愛情で包んで育てていく母の視点で書かれた物語でした。しかし、題名は『サンキューフォーマザー』だったのです。おそらく、絵本作家が自分の母親に感謝を込めて書いたのだと思います。私は、母からの久しぶりの絵本のプレゼントに喜びつつ、この本の母の愛というテーマに合わせ、離れて暮らす母からの遠くから

のまなざしと寂しさが伝わってきた気がしました。その言葉では書かれていない母の言葉に、私も母に絵本を送り応えました。気持ちは伝わったよ、と母に言いたかったのです。

この柳田先生の絵本大賞を知ったのは、三年前です。そのときから、今までの私の絵本との関わり、そして会う度老いていく気がする母への感謝の思いを伝えるために、心にある言葉達を文字化したいと思っていました。仕事に追われ書けずにはいましたが、やっと書くことができました。これからは母に変わり、私が絵本の素晴らしさを伝えていきます。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

谷村新司作詞・作曲の「いい日旅立ち」の歌詞に、

いい日旅立ち　夕焼けを探しに

母の背中で聞いた　歌を道連れに

という一節がある。桃井さんの手紙を読んでいて、私の脳裏にふとその一節が流れたのだ。

桃井さんからの便りは、子育て中の親からのものと一味違っていて、絵本を介しての母と自分の繋がり心の軌跡と言おうか。とりわけ自分の幼少期には、母の意向で四方を絵本に囲まれ、毎晩寝る前に母が絵本を読み聞かせてくれた頃の情景が目には浮かぶようにしつとりと回想されています。そんな日常が幼い子の感性や知的思考力をどのように成長させるかが、小学生になってからの自己分析的な記述によってよく伝わっています。それだけで、子育て中の親たちが、絵本の読み聞かせによって子どもの心がどのように発達するのかを理解するうえで、とてもよい報告になっています。

そして、幼少期の環境と母親の毎日の読み聞かせによって育まれた“三つ子の魂”は、成人して社会で仕事をするようになって

からも生きていて、人間関係で悩むときに愛読の絵本で心を癒したり、離れて住む母親との心の会話として絵本を媒体にしたりしているですね。

私は、「絵本は人生の三度（幼少期、子育ての時期、その後は自分のために）」とか「大人こそ絵本を」と、かねて語ってきましたが、桃井さんの場合は、「絵本は人生の一筋道」とでも言いましょうか。心に染みる便りを書いてくださり、ありがとうございます。ありがとうございました。